

精神障害をもつ息子と 要介護3の母親の在宅生活を支援する

●事例提出者

Wさん 居宅介護支援事業所・
看護師

W

●クライアント

Bさん（79歳・女性）

B

▼傷病名：アルツハイマー型認知症

▼介護度・自立度：要介護3、A-2、Ⅱb

▼家族構成

次男：37歳（統合失調症・精神障害者保健福祉
手帳1級）、Bさんと同居

長男：51歳。他県在住。大企業の営業関係の部
署に所属し、日本中を飛び回っている

長男の妻：キーパーソン（すべての窓口）

長女：同じ市内に住むが協力は得られていない

▼現在の支援にかかわる関係機関

Bさん：訪問介護・訪問看護・通所介護・介護老
人保健施設・病院（精神科）・市障害福祉課

次男：作業所・訪問介護・訪問看護・病院（精神
科）・市障害福祉課

◆生活歴・支援経歴

・会社員の父と専業主婦の母の間に4人きょうだ

いの長女として県内他市で生まれる。

- ・高校卒業後24歳で結婚するまでは家事手伝い。結婚後は夫の事業（自動車修理工場）を手伝う。28歳で長男を出産。その半年後に夫が急死。このとき、うつ状態になるが治療せず回復した。
- ・生活のために独身寮の寮母の仕事をしなが、栄養士の資格を取得し、企業で社員食堂の栄養管理の仕事に就く。
- ・34歳で再婚。仕事を辞め、次男、長女を出産。
- ・小さい子どもを抱えながら、姑の介護を10年以上続けた。
- ・姑が亡くなったのをきっかけに45歳頃うつ病を発症。3カ月の治療で回復した。
- ・77歳のときに、夫ががんで死亡。うつ状態となり、近医で治療開始するが、思うように改善せず、昨年の6月に現在の主治医に変わる。
- ・うつ状態は改善傾向であったが、今年2月頃、手が動かない、足のふらつきが強くなる、寝返りがうてないなどの状態が続き、入院となった。入院の翌日には、立位保持や歩行が自力で可能となり、「私は入院などする必要がない」などの不満の声が聞かれた。
- ・この時点で、同居している次男から「母親の介護量が増えると大変」「母親の言葉の暴力がある」等の理由から受け入れ困難との情報があ

る。在宅生活を目標に、かわりを始める。
・訪問介護等の支援体制を整え、次男も納得の上

で2月に退院。さまざまなサービスを利用しながら、次男と在宅生活を送っている。

ケース検討会

※本検討会は司会・進行と記録のトレーニングを兼ねて行われたため、前半部分の進行役とケース情報等のホワイトボードへの記録は現場実践者が担当しています。

ケースの全体像をつかむ ＜見立て編＞

本人・家族の意向、支援の状況について

進行役 ありがとうございます。利用者は79歳の女性Bさん。今年2月に退院されて、約半年間次男と二人で在宅生活を送っているという事例です。まずは事例の＜見立て＞のための情報を共有したいと思います。ご質問をお願いします。

発言 Bさんご本人と次男、長男とその奥さんはそれぞれ、お二人の在宅生活についてどのような感想や意向をもっているのでしょうか。

Wさん ご本人は「今住んでいるところは自分の家なので、息子とずっと一緒に暮らしていきたい。次男は私がいなければ生活ができないから」とおっしゃっています。

次男さんはすごくエリートのかようななかで育って、ずっと肩身の狭い思いをしてきました。お兄さんも妹さんもいい大学を出て、それぞれ高学歴の伴侶を得ています。嫌な言葉ですが、子どもの頃から「寄生虫」とか「役立たず」といった言葉を母親であるBさんから言われ続けてきたそうです。そんなこともあって、自分の許容範囲以上の指示をされるとパニックになって、「母をどこかにやってくれ!」「病院に入れてくれ!」「どこかに預けてくれ!」という訴えが出ます。

でも、その後で冷静になると、「戻ってきてもいいよ」となるのです。一度、Bさんが少し長く入所したことがあるのですが、「やはり母親がいないと寂しい。うつになる」とおっしゃっていたこともあります。

いま、キーパーソンとして一番かかわっているのは長男の奥さんですが、彼女は二人で家で生活させてあげたいという思いをもっておられます。

長男は、一番気持ちの変化があった方です。最初は「この二人が一緒に在宅生活なんて無理に決まっている」という考え方だったのですが、最近では「ヘルパーさんを入れればなんとかできるんじゃないか」と変わってきています。

発言 次男の統合失調症の発症はいつですか？

Wさん 20歳よりは前のようですが、正確な年齢はちょっとわかりません。

発言 Bさんのアルツハイマーの診断はいつついたのですか？

Wさん 今年の1月に入院したときです。アリセプトが出ています。

発言 経済面はどんな状況かわかりますか？

Wさん 家賃収入がかなりあり、金銭的にはまったく困っていないと聞いています。ご本人もBさんも年金が出ています。金銭管理は長男の奥さんが行っています。

発言 ヘルパーさんは具体的にどんな支援をしているのですか？

Wさん 朝、昼、晩の食事のほか、買い物や掃除、それとBさんが次男さんによく「あれやって、これやって」と言っ、その回数が多くなると次男がパニックになって暴れ出すというパターンが多いのですが、そういうことが起きないように、B

さんから次男に要求が出たときに間に入って対応していただいています。

発言 Bさんはどんな生活スタイルを望んでいるのですか？

Wさん 生活スタイルですか……。考えてみれば、「二人で生活したい」という以上に、どうしたいのかという点はお聞きしたことがありませんでした。私たちとしては、お二人と一緒に暮らすためには、次男の介護負担を減らすことが大事だと考え、次男の作業所がお休みになる週末はBさんに短期入所に入っていただき、週2回は社会交流と入浴機会の確保のためにデイへ、あとの2日はご自宅でゆっくりしていただくというプランを作っています。ご本人は「これでいいよ」とおっしゃってくださっていますが、そうですね、「どんな生活スタイルがお望みですか？」とは聞いていませんでした。

進行役 次男のほうは今の生活についてどうお考えになっているのでしょうか？

Wさん Bさんのたび重なる要求というか命令によってパニックになることもあるのですが、関係がよいときは和気あいあいとして、本当に仲のよい親子ですし、次男さんとしてはBさんと一緒に生活したいのだと私たちは思っています。ただ、次男に主にかかわっている作業所の方や訪問看護師、それと次男の主治医などは、同居に否定的なのです。お母さんと一緒にいるから次男がおかしくなる、お母さんを介護する負担によって次男は落ち着いた生活ができない、という見解をもってられるようです。

発言 次男は結婚経験はないのですか？

Wさん はい、ありません。

発言 就労経験は？

Wさん ありません。

発言 次男がBさんに経済的に依存しているということはないですか？

Wさん 次男も障害年金を受給していますし、ご

自宅は持ち家で家賃もかかりませんので、そういう側面はないと思います。

家族、親族、地域との関係について

発言 ご主人が生きていらっしゃったときは3人暮らしだったのですか？

Wさん はい。

発言 その頃の家族関係はわかりますか？

Wさん 長男の奥さんからは、亡くなったご主人が次男さんのことをかなりカバーするかたちで生活されていたとお聞きしています。ご主人がいたからこそ、うまく家庭がまわっていたとおっしゃっていました。このお宅の「要」だったのだと思います。

発言 長女のかかわりはまったくないのですか？

Wさん 長女は同じ市内に住んではいるのですが、長男夫婦に比べるとかなり疎遠ですし、Bさん本人も期待している感じはありません。決して嫌い合っているわけではないようですが……。どんな背景があるのかはよくわかりません。

発言 近隣とのおつき合いはあるのですか？

Wさん Bさん一家はこの地域に長く住んでいらっしゃいますが、近所の方はわりと住み替わっているようで、長いつき合いをしているご近所さんはいないようです。ただ、一軒親切な方がいらして、次男が土日一人にいるときにコロッケなどのおかずを持ってきてくださったりすることがあるようです。

発言 Bさんご自身はごきょうだいとどんな関係なのですか？

Wさん Bさんは4人きょうだいですが、2人は亡くなられています。一番下の弟さんは他県に住んでいて、まったく交流はないそうです。

進行役 Bさんと次男がそれぞれ頼りにしているのはどなたですか？

Wさん Bさんは長男を一番信頼しています。実

際的に最も動いているのは長男の奥さんですが、やはり嫁と姑という関係性もあるのか、無条件に信頼を置いているのは長男ですね。次男は、作業所の方です。かなり以前からお世話になっているようで、絶対的な信頼を置いています。

発言 長男の奥さんは他県に住んでいらっしゃいますが、どのくらいの頻度でBさんのところにいらっしゃるのですか？

発言 入院される以前は、長男か奥さんのどちらかが毎週末に泊まりに来ておられたそうです。入院・退院時のカンファレンスや担当者会議などにも、そのつどいらしていただきました。最近は状況が落ち着いていることもあって、月に1回、病院受診のときだけになりました。

ふだんの生活状況について

発言 ご本人のADLや認知レベルの現状を教えてください。

Wさん 移動は家の中でも施設の中でも歩行器です。誰もいなければ、起き上がりも自立、トイレも自立ですが、誰かがいれば介助をしてもらっています。両下肢はかなり不安定で、いつ転倒してもおかしくない状態です。認知レベルは物忘れが多くなっています。現在住んでいるところが子どもの頃に育ったところになったり、タクシーで病院に行っても、「次男に送ってもらった」と言ったりといった具合です。

発言 次男がBさんの介護において担っている役割について教えてください。

Wさん 私たちとしては、次男の介護負担を極力少なくすることが大事だと考えていましたので、直接的に介護をする機会はほぼゼロです。ただ、最近はまだ少しふつうの同居家族として当たり前のことはやってもらってもいいのではないかと、という話はチーム内では出ています。

発言 1週間のサービス状況を教えてください。

Wさん 土・日・月が短期入所、火・木が通所介護、水・金が自宅にいらっしゃる日です。土・日以外は訪問介護が入っています。

発言 1日の生活の流れはどんな感じですか？

Wさん 朝は7時に訪問介護が入るので、その頃に起床します。火・木は通所介護があるので、早めに朝食を召し上がります。水・金は次男が8時20分に家を出られますので、その後でゆっくり朝食を召し上がるようです。夜はほとんどテレビは見ないので、20時にはベッドに入ります。

発言 次男の病気の状態はどうなのでしょう？

Wさん 少なくともここ数年は入院はありません。受診も服薬もきちんとされています。性格的にはとても几帳面な方で、作業所でも人一倍一生懸命に仕事をされるそうです。

発言 Bさんの若いときの趣味や、うれしそうにお話をされる話題などはありますか？

Wさん 趣味としては、50代から70代前半まではゲートボールをやっていたそうです。うれしそうに話するのは、10代、20代の実家にいた頃の話と、子どものこと、特に長男の自慢話はすごいです（笑）。

発言 先ほど、「Bさんはまわりに人がいなければ自立しているけれども、人がいると介助をもらっている」ということでしたが、どういうことなのでしょう？

Wさん Bさんの性格がかなり依存的なのです。次男だけでなく、そこに立っている人なら誰でも使うというところがあります。

発言 Bさんはかなりご高齢ですが、母親として、次男の今後の生活などについてはどうお考えになっていらっしゃるのでしょうか？

Wさん 最近のことですが、「私はいつかなくなる。この子（次男）が家を継ぐのだから、この子にはしっかり家を守ってもらいたい」とおっしゃっていました。

進行役 土地や建物はBさんの名義ですか？

Wさん はい、そうです。

進行役 ありがとうございます。そろそろ時間が来ましたので<見立て>に関するやりとりはここまでにして、後半は野中先生に<手立て>についての進行をお任せしたいと思います。では、先生、よろしくお願いします。

二人の能力をより詳細に把握する

野中 ここまでのやりとりで、事例にまつわる情報がいろいろと出てきました。進行役としては、かなり上手にかたちを作れていると思います。ただ、まだもう一つお二人がどんな暮らしをしているのかが見えてこないところがあります。少し具体的にお聞きしますね。まず、ADLですが、食事はどんなものを食べているのですか？

Wさん 食事は基本的に三食ともヘルパーさんが調理したものを食べています。ごはんにおみそ汁、焼き魚といったような、この世代の方がなじんでいるメニューが多いと思います。

野中 ヘルパーが入らない週末は、次男はどんなものを食べているのですか？

Wさん 冷凍食品をチンしたり、焼きそばやカレーを作ったりしているようです。

野中 焼きそばには野菜を入れていますか？

Wさん はい。私が見たことがあるのは、もやしとキャベツが入っていました。

野中 あなたが食べたいと思う出来でしたか？

Wさん はい。おいしそうでした。

野中 カレーも自分で作るのですか？

Wさん 「作ったことがある」とは聞いたことがあります、実際はヘルパーさんがまとめて作ってくれたものや長男の奥さんが来たときに買ってきてくれたり作り置きしてくれたものを、あたためて食べていることが多いようです。

野中 そのほかには何か作れますか？

Wさん あとはわかりません。

野中 なぜ料理のことをしつこく聞くかという、どんなメニューをどんなふうに使っているかは、精神科医にとっては診断の目安になるような重要な情報なんです。

Wさん なるほど――。

野中 Bさんの排泄はどうですか？

Wさん 自宅のトイレでしています。

野中 歯磨きや洗面は？

Wさん 歯磨きは朝と寝る前に洗面所でしています。洗面も自分でしています。

野中 着替えは自分でできるのですか？

Wさん いえ。自分ではできないので、ヘルパーさんがしています。

野中 睡眠は良好ですか？

Wさん はい。よく眠れています。

野中 夜間の排泄は？

Wさん 自分で起きて、ベッドの脇に置いてあるポータブルトイレで済ませています。

野中 うーん、どうも怪しいですねえ（笑）。アリセプトを服用して6カ月ということですが、どんな効果がありましたか？

Wさん それが、あまり効果はなくて、むしろ物忘れが多くなったというか……。自分が住んでいた場所もわからなくなったり、今日はどこから来たかというのも曖昧になったりしています。

野中 時間の感覚はどうですか？

Wさん それは大丈夫です。

野中 人物誤認はありますか？

Wさん 人を見間違えることはありません。

野中 なるほど。アルツハイマーの診断をしたのは何科の医師ですか？

Wさん 内科医です。

野中 その人は信頼できる医師ですか？

Wさん うーん……はい（苦笑）。ただ、その後は精神科のドクターが主治医になっています。

野中 時間の感覚は狂っていない。人物誤認もない。夜に起きて自分でポータブルトイレで排泄で

きる。ADLの状況などを聞いていると、どうもアルツハイマーというのがピンときません。今後、Bさんの支援を適切に行うためには、何の病気を押さえることは不可欠です。納得できるまでは根拠を確認するなど突っ込むことが大切です。Wさんは看護師出身なのですから、医者とのつきあい方もわかるでしょう？

Wさん はい、まあ……。

野中 次男の主治医はどんな人ですか？

Wさん 精神病院の精神科のドクターです。

野中 次男の入院歴はわかりますか？

Wさん 情報不足ですみません。

野中 そのあたりを知っているのは？

Wさん 次男が信頼している作業所の方です。

野中 では、その人から病歴と次男がいまどんな状態なのかを聞くことができますね。そこを押さえないと、次男にどのくらいの負荷をかけていいのかがわかりません。状態を聞いていると、本当に統合失調症なのか怪しい感じもするんです。もしかするとアスペルガー症候群かもしれません。

Wさん 私はBさんのケアマネなので、次男の支援をしている方たちから次男の状況について直接お話を聞くのはためられるので、長男の奥さんを介していろいろなことを聞いていただこうとしているのですが……。

野中 正確で質のよい情報がこちらに届いているならば、その方法でもいいんです。しかし、このケースではうまくいっていませんよね。WさんたちがBさんの在宅生活を支援しようとするとき、次男の情報は絶対に不可欠です。それがわからなければ、Bさんの支援に責任を持つことができないはずです。

Wさん たしかに……。

野中 であれば、次男を支援しているチームに情報を聞くのに遠慮など不要です。職業上の責任を果たすためにはどうしても必要なのですから。

Wさん よくわかりました。

具体的な対応策を考える

<手立て編>

医療情報の再確認

野中 では、ここまでで見てきた状況をもとに、これからWさんたちがBさんを支援していくためには何をしていけばいいのか、具体的な〈手立て〉をプランニングしていきましょう。アイデアを出してあげてください。

発言 ご本人の状況について、診断の根拠などをドクターにうかがう。

野中 診断名と治療上のポイント、予後をドクターとしっかり情報交換することですね。今の主治医はアルツハイマーが得意な人ですか？

Wさん どちらかというところ、不安神経症やうつなど、40代くらいまでが専門のようです。

野中 そういうドクターのところへどうしてBさんが行くことになったのですか？

Wさん 長男の奥さんがインターネットで検索し、近所で評判を聞いて選んだそうです。

野中 家族はそのドクターにどんなことを期待していたのでしょうか。

Wさん う〜ん、そのあたりは聞いたことがありません。

野中 そこは一度確認しておいたほうがいいでしょうね。それと、今の主治医の専門がそういうことであれば、認知症の相談センターのようところでセカンドオピニオンをとるのも有効ですね。

Wさん はい、わかりました。

より安定した同居生活に向けた支援

野中 ほかにはいかがでしょう？

発言 Bさんはかなり能力はありそうなので、できることはご自分でしてもらおうようにしてはいかがでしょうか。

野中 そうですね。援助を行うことが本人の役割や能力を奪う方向に作用しては元も子もありませんからね。

発言 おそらく、今のように状態が落ち着いてくるまでには、Bさんご本人も次男も成長しているところがあると思いますので、そこを認めるような言葉かけがあるといいかな、と思いました。

野中 かかわりのなかで肯定的なフィードバックをする。とても大事なことですな。

発言 Bさんと次男のお二人とも自宅で一緒に暮らしたいという希望をもっているようですが、二人きりだとギクシャクした関係にすぐになってしまうようなので、想定できるリスクに備えた対応策を考えておく必要はないでしょうか。

野中 いいですね。あらかじめ起こりそうなことはこれまでの経験から予測が立つでしょうから、たとえばBさんが何度も何度も指示をして次男がパニックになりそうになったときの連絡先リストを作るなど、マニュアルを用意してあげるのも一つの方法でしょうね。

発言 二人の同居がうまくいくような環境面での工夫は考えられないでしょうか。

Wさん 実はその点を私たちも考えて、3カ月ほど前に2階に次男用のトイレを作り、家庭内別居ができるような状態にしました。それ以降は、かなりうまくいっています。

チーム間の対話、家族の意向の再把握

発言 今さら蒸し返すようで恐縮なのですが、前半のやりとりのなかでWさんがおっしゃっていたことのなかに、次男を支援している専門職の方たちは、Bさんと次男の同居についてネガティブな感想をもっているようだ、ということがあったのが引っかかっているのですが……。

野中 とても大事な点ですね。高齢者支援チームと障害者支援チームが援助の出発点でボタンを掛

け違っている可能性があるわけですね。

Wさん たしかに……。

野中 もしそうであれば、よけいに向こうのチームと情報交換をしたり協議をすることが大切ではないですか？ 窓口はありますか？

Wさん はい。作業所の職員の方とは面識がありますので、お話しはできます。

野中 では、そこからでもいいですし、「次男支援チームとしてのアセスメントとプランニングを聞かせてください。一度一緒に協議をしましょう」と働きかけることが大切ですね。

Wさん わかりました。

発言 今後のお二人の生活を考えていくとき、お二人の意向が中心になるのは当然としても、専門家チームだけではなく、ご家族がどのように思っているのかもあわせて考えていくことが大切ではないでしょうか。

野中 そのとおりですね。最初の質問で家族それぞれの意向をWさんがおっしゃってくださいましたが、家族としての方向性をもう一度集約してもらうことが大事ですね。

発言 Bさん自身にとって夢のあるプランを描くための情報が少ないように感じるのですが。たとえば、かつてのお正月の迎え方など、昔の家族行事などについてうかがってみて、それを再現するといったようなことはどうでしょう。

野中 それも一つの方法ですね。「夢プラン」のヒントは過去の生活史にあります。アルバムなどを見せてもらおうと、昔の生活のしかたが一気にわかったりすることもありますよ。それと、面接するときの基本的姿勢を「問題発見型面接」から「能力発見型面接」に変えることも重要ですね。

Wさん 「どう暮らしたいのか」は、これからぜひうかがってみようと思います。

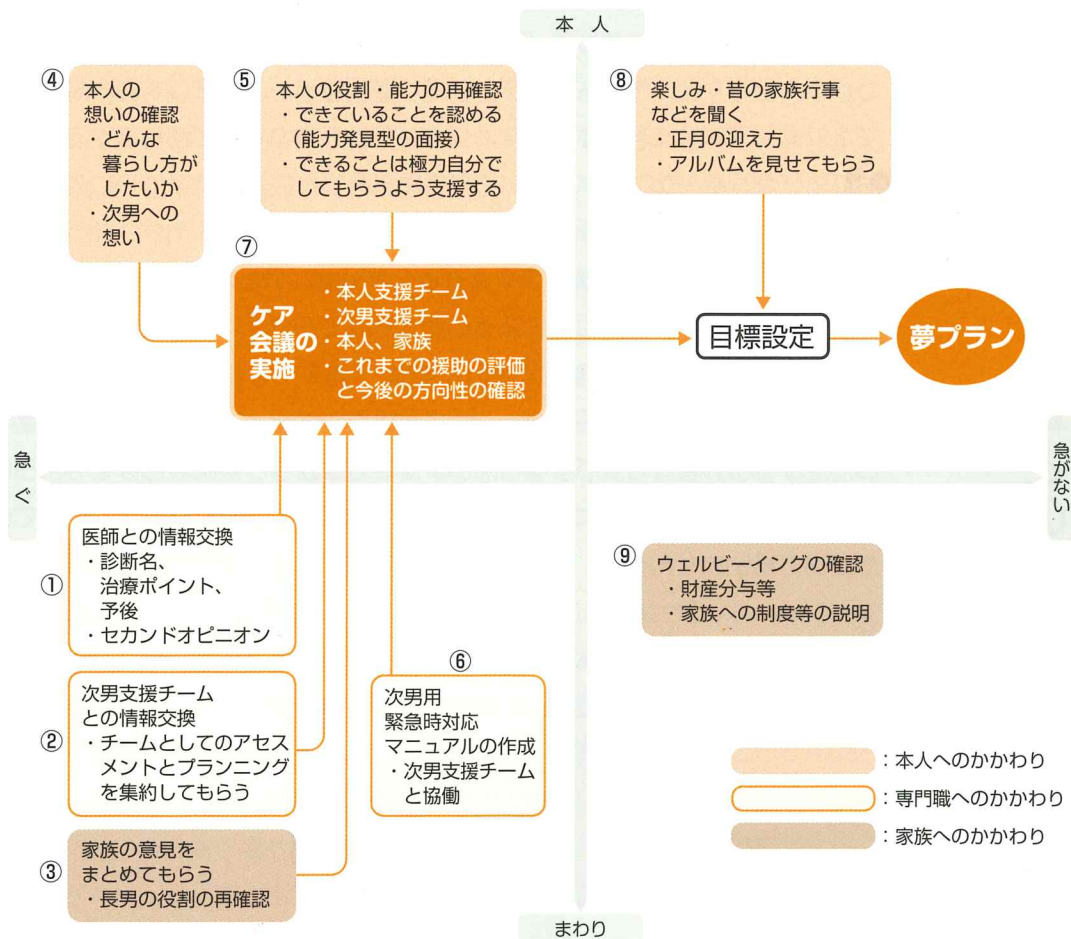
発言 Bさんの年齢的なことを考えると、かなり財産をお持ちですし、今後のことについてどんな制度や仕組みがあるかを情報提供する必要はない

でしょうか。

野中 ウェルビーイングですね。財産分与について決めておいてもらわないと、後で戦争になってしまいますからね。みなさんから出していただいたプランをまとめると、十文字表のようになりますで

しょう。こんなところでどうですか、Wさん？

Wさん おかげさまで頭の中がスッキリしました。どれもすぐに取りかかれる内容ばかりなので、早速明日から実行に移していきたいと思います。ありがとうございました。



＜野中方式＞が学べる唯一の本 ケア会議の技術

野中猛、高室成幸、上原久＝著

中央法規＝発行 定価2,730円(税込み) 318頁

第2部・事例編には、当コーナーにこれまで掲載された9事例が、新たに解説付きで収められています。

